

# 四季彩便り

2011・初春

発行人 光が丘堂 裕子  
サニ四季彩便り  
漢方酒見  
(092)927-2693

## 極寒



春のけの土きぎすといふ日より

さらにはげしき木枯の風

六帖詠草 小沢廬庵

なんと寒い冬でしょう！

見るものすべてが灰色に包まれたモノトーンの世界。

遠くに黒々と連なる山の頂には、いまだに白く雪が残り、つんと冷えた夜空には、月の光がいつそう冴えて見えます。

降り積もった車の上の雪降ろしを何度も経験したことは、北国に暮らす人々の過酷な生活に思いを馳せる機会となりました。

「一月は行く、二月は逃げる、三月は去る」などといいますが、月日の流れが年々早くなっているような印象を持つのは、それだけ私が歳をとった証なのでしょう。

今年の干支は卯：私の年でもあります。人生一巡、老化に抗いながら、気持ち新たに、今年も中国医学の研鑽に努め、皆さんの心と身体の健康のお手伝いをさせていただく所存です。

今年もよろしく願います。  
もうすぐ立春。♪春よ来い 早く来い♪



## 伝統薬探訪

寒い冬は「ひび、あかぎれ、足のかかとのひびわれ」など、特に女性にとってはずらひ季節ですね。

「やかんのお湯でひどい

やけどを負ったけど、この薬を

タツプリ塗ったらあとも

残らず治った」。

「ナイフで切った子どもの傷が

すぐに治った」。

外傷用軟膏「トフメルA」は、やけど、切り

傷、しもやけ等に抜群に効くと評判が高い。

右は伝統薬トフメルAについて、『妙薬探訪』で紹介された記事の一部です。

この薬の特徴は主成分のラノリンにあります。

ラノリンは羊の毛からとった脂肪を精製したもので、記録によれば、ローマ時代から薬として使用されていたそうです。

開発したのは九州大学医学部卒の渡辺福太郎医師。

一九三二年から本格的な製造を始めたといえますから、およそ八十年もの間、支持され愛用され続けてきたわけです。

最近「床ずれによく効いた」とか、「アトピーにいい」といった利用者の声が、製造元に届いているとのこと。

一家にひとつ常備しておくとお重宝する、まさに妙薬です。



## 折々の薬草

ナンテン

(生薬名)

南天竹なんでんちく



見慣れた植物ナンテンは、東南アジアが原産地といわれるメギ科の常緑低木で、古くから庭に植えられ、花の少ないこの時季に真っ赤な実をつけた枝が、松とともに床の間を飾ると、「お正月」という節目を迎えた、どこか清々しい気分が満ちてきます。

お祝い事に使われるのは、「難を転ずる」という縁起かつぎだけでなく、南天の葉の防腐作用を利用した習慣です。

できたてのお赤飯の上に南天の葉を置く風習には毒消しの意味があります。

薬用には乾燥した果実(南天竹子なんでんちくし)を咳止め・解熱の目的で煎じて使用します。

また、江戸時代の医書には「**歯痛のとき南天の葉をふくむ**」(「救民妙薬」)とか、「**歯茎が腫れて痛む場合は南天の葉と実を煎じてふくむ**」(「経験千方」)との記述があります。

蜂に刺された時は生の葉を揉んだ汁をつけると痛み止めになります。

南天に含まれている防腐・殺菌成分は、分解すると胃酸を発生させるので、使用する量に注意が必要です。

白い実がつくシロミナンテンも働きは同じで、差はありません。

元禄のころ、長崎に来ていた植物学者ケンペルがこの赤い実を見て感動し、十八世紀の終わりには現物がヨーロッパに紹介されたと伝えられています。